だから職員が辞めていく
ダメな施設を選ばないために 1

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2014-09-17 キーワード (Ja): キーワード (En): nursing home, care staff, turnover, organizational change, service management, Tohoku Gakuin University 作成者: 岡田, 耕一郎, 岡田, 浩子 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/213

だから職員が辞めていく

ダメ職場を選ばないために

1

岡田耕一郎（おかだ・こういちろう）
東北学院大学経済学部・准教授。経営組織論。日本、スウェーデン、ドイツの介護サービス組織のマネジメントを研究。

岡田浩子（おかだ・ひろこ）
介護福祉士、社会福祉士。共著として07年に『老人ホームをテストする』を暮しの手帖社から出版。

有名施設がいい職場とは限らない

選び方で「天地」の差が

昨年、『老人ホームをテストする』（暮しの手帖社）を出版した。本書は、老人ホームに入居しようとする利用者とその家族が老人ホームを選ぶ際に、どのような老人ホームが良いのかを商品テストするためのものであり、読者の大半が全くの素人であることを念頭に置いて、チェックするポイントを分かりやすく体系的にまとめたものである。見方を変えると、老人ホームの善し悪しを包括的に分析しようという試みなので、就職先としてどのような老人ホームを選んだらよいのか、「職場選び」の教科書としても活用できる。そこで、この連載では、老人ホームを「福祉実践の場」ではなく「労働者の職場」ととらえて、職場選びのチェックポイントについて紹介していくことにしよう。

始めに、福祉分野で働く人たちや福祉を学ぶ学生にしばしば見られる、独特の職業観について、経済学部の学生の職業観と（ステレオタイプ的に）比較しながら少し触れておくことにしよう。

経済学部では民間企業に就職する学生が大半であり、企業を選ぶ際には行きたい業界を絞り込むが、その業界の個々の企業がそれぞれ個性的で、全く違う考え方でビジネスを展開していることを十分に理解している。それを踏まえて、どの企業に自分が合っているのかを検討し企業を選ぶので、単純に業界だけを決めればよいという発想はない。「働くこと＝会社を決めること」なのだ。

ところが、社会福祉学部の学生の中には、たとえば介護福祉の業界に行こうと決めたならば、その業界の中の老人ホームは、どこでもそれほど変わりはないと考えて、とりあえず内定をくれたところに就職しようとする者もいる。つまり、老人ホーム間で違いがあることはそれほど意識されておらず、彼らの職業観は「働くこと＝業界を決めること」である。もちろん、実際に働いてみると分かるのだが、施設によって待遇は天と地ほど違うので、職場に対する無関心は致命的である。

さらに、気になるのは、経済学部の学生は「働くこと＝給料をもらうこと」とまずは考えるが、社会福祉学部の学生は福祉に対する自分の情熱が先走ってしまい、「働くこと＝自己実現すること」と位置付けてしまう点である。このように、究極の目標を社会人の最初に設定してしまうと、不眠不休で働き、自己犠牲をいとわない高邁な理想の福祉実践者にならないと引っ込みがつかなくなってしまう。もちろん、その数歩先には燃え尽き症候群という暗くて重い現実が待ちかまえているのだが、あくまでも自己責任であることはいうまでもない。

それ以外にも就職に関しては、いろいろと困った問題が多い。たとえば先駆的な介護を実践して介護の「質」を向上させたとされる現場の人たちを賛美するプロパガンダ本に洗脳され、就職先を選ぼうとする学生がいる。本の行間には「先駆者たち」の薄っぺらい理想と狡猾な偽善が見え隠れするが、見当識がぼんやりとしている若者を介護というバラ色の戦場に誘うには十分だ。あるいは、テレビや新聞や雑誌などに取り上げられた有名な施設であれば、質の高い介護を提供しているはずだと盲信して、就職先を選ぶ真面目な学生がいる。しかし、似たような利用者を抱える似たような老人ホームは、似たような介護報酬で経営されているので、職員が普通に働くのであれば、似たような介護サービスしか提供できないはずであり、突出した質の高い介護サービスは明らかに「うま過ぎる話」である。ということは、「普通に働く」わけではないことになる。哀れ、紅顔の若者は夕べには白骨となり戦場の露と消えてしまう。

果たして、4年間ぼーっと大学生活を送って老人ホームの実態に目を向けなかった学生側が自業自得なのか、とりあえず就職させればお役ご免と考える大学側に問題があるのか、はたまた施設側がしたたかに職員を使い捨てていく傲慢さがやり過ぎなのか、バラ色の介護の理想を捏造する出版社が商売熱心過ぎるのか、おそらくはこの事件にかかわる全ての当事者の「無責任」のなせる絶妙の技なのだろう。

閑話休題、これらの問題は、わが国の介護にとって、ひどく深刻な意味を含んでいる。というのは、高邁な理想の福祉を錦の御旗にした老人ホームは一般労働者を超越した絶対的な存在であり→サービス残業などどこ吹く風、有給休暇を取りたいなど甘いあまい、休日出勤もお手の物、全身全霊をかけて福祉に邁進せよと叱咤激励→そんな人たちが集まれば、施設はもはや女工哀史、普通の人では勤まらない→凡庸な労働者は疎外され、理想を追いかける若者は燃え尽き、後には暑苦しく理想の介護を語る不屈の鉄人だけが残されることになる。つまり、介護現場から人が消えてしまうのだ。

さて年が変わり、春になれば、また理想を追いかける若者は、理想の老人ホームにどっと押し寄せるのかもしれない。しかし、理想を掲げてがんばる人たちが若い介護職員の人生を搾取し、結果として、介護の業界を真面目に真綿で首を絞めていることには変わりはない。もちろん、営利に走った老人ホームの老獪な経営者が若者たちの上前をはねているケースも少なくないので、彼らは積極的に介護業界を崩壊させた張本人だ。業界を指導する立場にあるので厚生労働省もいわずもがな。

ここで改まっていうほどのことではないが、就職は自分の人生を犠牲にする滅私奉公ではなく、燃え尽きて心の病になることでもない。自分が志した福祉の仕事を通して、いくらかでも社会のお役に立ち、がんばった分は当然、お給料として受け取る仕組みなのだ。

時は来た。さあ、職員のみなさん、当たり前の人間として、そろそろ当たり前の生活をしようではないか。利用者がその人らしい、当たり前の生活を送るのであれば、職員だって当たり前の人生を送る権利くらい保証されてもばちはあたらないだろう。

それでは老人ホームの選び方のはじまり、はじまり。